

新春法話「小さな喜びを大切に」

あけましておめでとうございます。

今年も正光寺初詣にお参り頂きありがとうございます。

昨年を表す漢字として、夏のロンドンオリンピックの日本人選手たちの活躍や、京都大学山中伸弥教授のノーベル医学賞受賞、約三百年に一度日本付近で見られる金環日食の体験などから「金」という字が選ばれました。平成二十二年は「暑」、平成二十三年は「絆」と毎年十二月十二日、日本漢字能力検定協会が公募して「今年の漢字」が選ばれます。平成七年から始まる「今年の漢字」、過去の選ばれた字を見るだけでおよその年の世相を知ることができそうですが、未だ「喜」という字が選ばれた年がありません。おそらく一年を通じて人々が日常生活に喜びに満ちる年がないからなのでしょう。

私たちは、自分の一生を喜びに満ち溢れた中で最期を迎えられれば、幸せと考えるでしょう。しかしこの場合の喜びとは、お金や名誉など欲によって得た喜びでもなく、華美を求め、虚飾におどることで得た喜びでもなく、他人の失敗や不幸など嫉妬心から得た喜びでもありません。こういった喜びは所詮「砂上の楼閣」で、崩れやすいもので、真の喜びとはいえないでしょう。そんな喜びを追い求める人の心には、かえって、得た喜びを失うことに不安を抱き執着を強めていきます。やがて執着によって人生は迷いに迷い、結果苦しみの海におぼれて一生を終えることになるでしょう。

実にこの世の中は、四苦八苦で示されるよう苦に満ちており、自分の一生を思い通りに過ごすことは不可能です。お釈迦様はこの「一切皆苦」の教えを通じて、諸行無常の世の中では執着な心を捨てることを説きました。執着を捨てた中で真の喜びを見つけることが仏教徒の生き方です。真の喜びとは日常生活で積み上げてきた小さな喜びの集大成と言っていていいでしょう。

小さな喜びは、実に簡単に感じる事ができます。一つは、朝目覚めたときです。眠って目覚めるは、当たり前前の日常生活ですが、朝目覚められる保証というものは百パーセントではありません。何事もなく朝を迎え目覚められたなら、素直に喜びを感じてみてはどうでしょうか。

二つには、自然に身をおいてみる事です。空を見て、風を感じ、季節の花を愛で、鳥の鳴き声に耳を傾けるだけで、心は洗われ、自ずと心の中に喜びを感じることでしよう。

三つには、人間関係において、自我を捨てて、相手の立場にたつて物事を考え、喜んでもらえるように行動することです。このことを「利他の精神」と言つて、仏様の心を表す言葉の一つです。

三つのことを実践し、小さな喜びを積み重ねていけば、次第に生かされていることを実感することでしょう。自分は生きているのではなく、生かされているという思いにたてば、自然と誰にでも感謝の気持ちがあふれるはずで、感謝の気持ち、自然と自らの心に揺るぎない安心を築いてくれます。この安心が、私たちに心身を健康にし、生きがいをもった人生に導いてくれることでしょう。

今年で東日本大震災から二年の月日が流れようとしています。復興はまだまだ道半ばです。今年一年が、多くの人々が小さな喜びを積み重ねて、大きな喜びに包まれる社会になることをご祈念申し上げ、一言新春の法話とさせていただきます。

合掌

平成二十五年 癸巳 元旦

延命山正光寺 住職 高野隆晃